【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（中学校用）

都道府県名	島根県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	**西ノ島町立　西ノ島中学校**					
学年	１年	２年	３年	特殊学級	計	教職員数
学級数	１	１	２	１	５	１７
生徒数	３３	２９	４８	１	１１１	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

「確かな学力」の向上をめざして
～基本的な学び方や「読み・書き・計算」を伸ばすことを中心に～

２．研究内容と方法

⑴　実施学年・教科

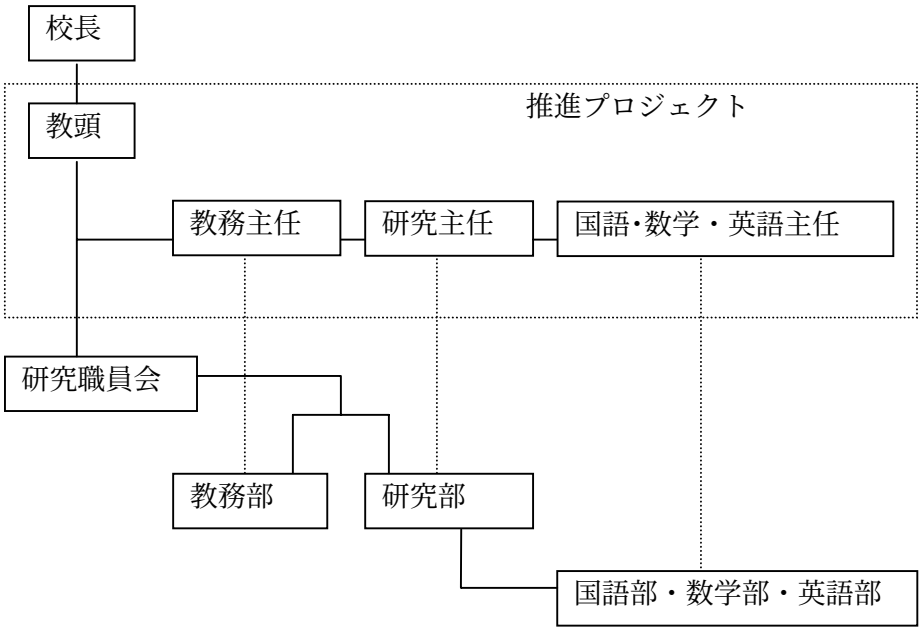
・　１・２・３年　数学
　平成１３年度より加配を受けて研究を進めてきた実績があるため。
・　１・２・３年　英語
　生徒の実態から実施教科の枠を広げて研究に取り組むため、本年度より加配を受けているため。
・　１・２・３年　国語
　生徒の実態から実施教科の枠を広げて研究に取り組むため、本年度より加配を受けているため。

⑵　年次ごとの計画

平成15年度	○テーマ 基本的な学び方や「読み・書き・計算」を伸ばすことを中心に ○研究の見通し 生徒に学習習慣や「読み・書き・計算」の能力を身につけさせることにより、中学校の教科学習の基礎基本を習得しやすい基盤を固め、確かな学力につなげる。 ○研究の内容・方法 ・読み・書き・計算の学習を継続して行うためのシステムを開発する。 ・国語・数学・英語の教科学習について、1クラスを2人の教員が指導する体制をとり、個に応じたきめ細やかな指導を実践する。

平成16年度	○テーマ 教科学習における基礎基本を確かなものにするために ○研究の見通し 生徒に学習習慣や「読み・書き・計算」の能力を伸ばし、中学校の教科学習の基礎基本を確実に習得させることで、確かな学力の向上を図る。 ○研究の内容・方法 ・読み・書き・計算の学習を継続して行うためのシステムを改良する。 ・1クラスを１人の教員が指導する教科にも枠を広げ、個に応じたきめ細やかな指導を実践する。

(3)　研究推進体制



学力向上フロンティアスクール実践研究推進プロジェクトを上記のように構成する。管理職のリーダーシップを効果的に機能させるため、教頭がプロジェクトに参加する。

数学・英語・国語の３教科については、時間割表上に部会を位置づけ、打ち合わせの時間を確保する。

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

ア　発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための学習教材の開発

○　基本的な学び方や小学校内容の「読み・書き・計算」を十分に身につけることができるような学習教材及び学習システム作り。

・　「学び方 TIME」の時間を毎朝２０分間設定し、漢字、計算、英文について家庭でのドリル学習と学校でのテストを関連させる教材開発と運用システムを開発した。

イ　個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善

○　数学・英語・国語について、全学年で少人数授業を実施。
・　年間指導計画に「少人数」「TT」の指導形態を表し、通年で実施した。
○　より効果的な少人数学級編成の方法についての研究。
・　年間指導計画に「少人数」「TT」の指導形態を表し、通年で実施した。
・　「コース分けの際に、生徒の希望を取り入れると、指導者が期待したコース分けとは異なる学習集団ができあがってしまう。特に補充を行うコースの人数が多くなりすぎ、補充指導を必要な生徒に対しての指導が手薄になったり、発展指導に取り組める生徒にとっての負荷が軽すぎたりする。」という前年度の課題を解決するために、単元の前半の指導過程に工夫を加えた。生徒が自分の習熟度に合ったコースを選べるようにするために、次のような基本となる指導計画を作った。それは、習熟度別のコース分けをする前の数時間をＴＴの指導形態で実施する。また、単元の学習に入る前にレディネステストを実施することである。この指導計画により、生徒が自分の習熟度を知ることができるようになったので、指導者が期待したコース分けにほぼ等しい学習集団が構成されるようになった。

ウ　児童生徒の学力の評価を生かした指導の改善について
○　指導と評価の一体化を図る。
・　少人数授業などきめ細かな指導を行っても、「おおむね満足できる状態」に到達しない生徒がいることの対策として、単元の後半の指導を工夫した。具体的には、単元の学習指導を一通り終えた後で「診断テスト」を実施する。その評価を個に応じた指導（補充・発展）に一体化するための時間として「フィードバックとアプリケーション」の時間を指導計画に組み込むというものである。この指導計画により、指導と評価の一体化を推進することができた。

２．今後の課題

今年度の研究は、「より効果的な少人数指導のありかた」を求めて始めたわけだが、一年間の研究の過程で、「少人数授業のコース内格差」を問題点としてつかむことができ、そこから「個に応じた指導」に研究の方向が向かうこととなった。「確かな学力を育てる」という目的を見失い、「少人数指導」という手段に固執していたことに気づくことができたのは成果だった。

今後の課題としては、次のものがある。一つには、「個に応じた指導」の手段についてである。本年度は教材による対応を行ったため、教室内での学習はプリントによる個別学習の形態となった。その結果、子ども同士の学びあいをさせることが少なくなってしまった。また、英語では「音声によるコミュニケーション」を、国語では「話す・聞く」を大切に考えているが、プリントによる個別学習の形態では対応ができないという問題も明らかになった。

二つには、何を「基礎基本」にするのかである。全生徒を「おおむね満足できる状態」に到達させるためには、基礎基本となる内容を生徒の実態に合わせて厳選して指導する必要がある。

三つには、自分で学習する力の育成である。大量の教材を作成して、「これができたら次のプリント」と指導計画を組んで子どもに与えたが、そのことによって子どもが自分で学習する力が育つことをつぶしてしまった感がある。子どもの自己教育力を育てることに視点をあてた研究の方向が必要である。

四つには、研究の成果の検証である。きめ細かな指導としてさまざまな手法を試みてきたが、それによる成果がどの程度上がったのかについて客観的な評価がなされていない。

Ⅳ　学力把握のための学校としての取組

前年度１年間の指導目標の実現状況を客観的に把握するため、教研式標準学力検査（目標基準準拠検査）を、国語・社会・数学・理科・英語について、４月に実施している。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

（公開授業の実施）１月に本校が地区協議会の会場であったため、本校の実践を広め、指導を受けるために授業を公開した。公開の対象は隠岐郡内小中学校職員、教育事務所、町教委、保護者、地域の方とした。
（通信）校報にて情報を発信した。
（説明）PTA 総会で保護者に説明した。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】☑１５年度からの新規校　□１４年度からの継続校

【学校規模】
□３学級以下　☑４～６学級
□７～９学級　□１０～１２学級
□１３～１５学級　□１６学級以上

【指導体制】
☑少人数指導　☑Ｔ．Ｔによる指導
□その他

【研究教科】
☑国語　□社会　☑数学　□理科
☑外国語　□音楽　□美術　□技術・家庭
□保険体育□その他